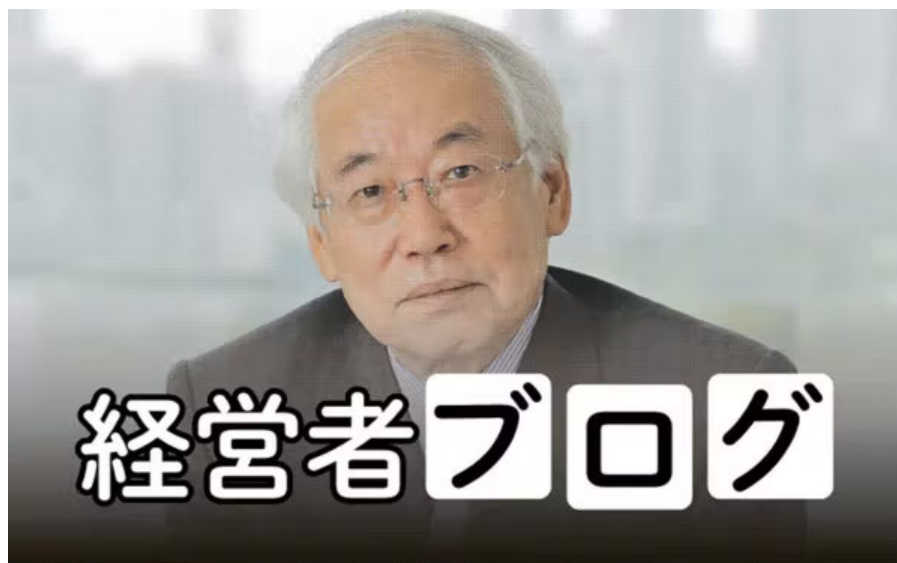


小麦畑に咲く小さな矢車草

経営者ブログ 鈴木幸一 IJ会長

2020/5/26 2:00 | 日本経済新聞 電子版



例年なら、5月の末になると、株主総会後に行く海外の投資家とのミーティングの日程調整、投資家を回った後、イタリアのラヴェンナ音楽祭でお目にかかるリッカルド・ムーティさんとの時間調整、バイロイト音楽祭やベルリンフィルのオープニングなど、時間を探し出しては、音楽祭や音楽家との時間調整に追われる。しかし、今年は、夏の予定すべてがキャンセルになる。一方、私と違って、欧州の人々のバカンスに対する執着は強く、地中海やポルトガルの海岸に行く人たちの夏のバカンスは、かなり解禁されるようだ。

■日本の特殊性

そういえば、ムーティさんも6月21日にはラヴェンナで、イタリアにおけるコンサート再開の始まりとなる演奏会をするといった知らせが来た。欧州の知人からは、「イタリアはもちろん、ドイツなどの欧州各国に比べると、日本は感染者、死者の数など桁違いに少なく、新型コロナウイルス対策はうまくいっているようだね。どうして、首相をはじめとして、得られる支持が少ないのか」と聞かれるのだが、答えに窮するばかりである。新型コロナのようなものが襲って、国が厳しい状況になると、どこの国でも政権を担う政治家や与党に対する支持が多くなるようだが、日本の状況は全く異なる。それこそ、現在の日本という国の特殊さなのかもしれない。

■月曜に自粛要請が解除

欧州では、新型コロナの対策として、都市封鎖など厳しい対策を実施してきたドイツ、フランス、英国、イタリア、スペインなどが、厳しい対応を緩和させる方向で走り出している。一方、「緊急事態宣言」によって厳しい自粛要請に対応していた日本も、ようやく月曜日には解除されたのだが、さまざまな自粛要請（規制？）については、状況に応じた判断を繰り返すことになるようだ。160万人を超す感染者を出している米国では、危惧する声押し切って、トランプ大統領の判断で、ほぼ全部の州で解除のようだ。保健・衛生より経済を重視した判断に違いないのだが、その是非は、日本から遠く眺めているだけでは、乱暴で怖い判断ではないのかなとは思っただけ、日本で在宅勤務をしているような人間には、わからないといった方がいいのかもしれない。

■コロナ後は経済成長か

経済の先行きについても、最近、ゴールドマン・サックスのヤン・ハチウス氏が、大胆な見方を公表している。「新型コロナはどんな金融危機よりも深刻で、第2四半期には経済活動が35%落ち込み、失業率も15%を超えるだろう。第2次大戦後で、財政も失業率も最も深刻な危機になる。しかし、その後は空前絶後の経済成長を実現することになるだろう。第3四半期の成長率は19%、第4四半期には12%の上昇が続く。金融もバラ色の市場が期待できる」と。世界で最も多くの新型コロナの感染者

を出しながら、徹底して、緩和措置を強行しているトランプ大統領についての見方も、日本のメディアだけしか触れないと、理解を超える気もするのだが、日本にいと、自ら幅を狭めてしまうのかもしれない。そういえば、リーマン・ショック後の金融危機の際、FRB（連邦準備理事会）やIMF（国際通貨基金）が実施した融資額は、ある短期資金の金融サービスに対し、一般的な28日物に換算すると、数兆ドルを超す支援をするなど、素人の私には天文学的数字に思えたものだった。それによって、欧米の銀行が救われたようだが、2008年のリーマン・ショックの金融危機からギリシャの破綻問題の処理に至る詳細を振り返って読んでいたのだが、今回の新型コロナと経済の今後についても、ゴールドマン・サックスの見方を紹介したくなってしまった。



東京都内では見かけなくなった矢車草

■ラジオの前に座り込む

友人が矢車草の写真を送ってくれた。子供の頃、月曜日から金曜日の午後4時すぎから、ラジオのNHK第2で放送される音楽番組が楽しみで、放課後、友人と遊ぶこともなく、家に戻って、ラジオの前に座り込んで、熱心に聞いていた。曜日によって、ジャズ、シャンソン、タンゴ、ラテン、ブルーグラスなどを、それぞれの音楽分野の著名な評論家が、音楽を紹介しながら、語る番組だった。シャンソンを担当していたのは、若い頃、フランスに留学、バレエ、シャンソン、演劇などの評論家、蘆原英了氏だった。ある時、蘆原氏が、ちいさなシャンソンですがと、紹介してくれたのが、ルシェンヌ・ドリールの「矢車草」の歌だった。数十年も、そう記憶をしていたのだが、[ネット](#)で調べてもルシェンヌ・ドリールの矢車草の歌は見つからない。私の記憶違いだと思うのだが、60年も記憶違いのまま覚えているのだから不思議である。矢車草とシャンソンの言葉でネット検索をしていたら、ジャン・コクトーが死んだ時の話があった。朝、エディット・ピアフの死を知り、同じ日に心臓発作を起こして死んでしまったジャン・コクトーの死を悼んで、その2年後に、つくられた歌手のジルベール・ベコーが作曲、ルイ・アマードン氏による「詩人が死んだとき」というシャンソンを紹介する記事があった。

憧れの人は埋められるだろう/広い小麦畑のなかに……/だから僕たちは見つけるんだ/この広い畑の中で……矢車草の花を

小さな花の矢車草だが、青紫の色が強い印象を目に残す。広い小麦畑のなかにちいさな矢車草の花を見つけたのは大変そうだけど、この年になって、広い小麦畑に咲く小さな矢車草を目にしたら、とても心打たれそうな気がする。

詩人が死んだとき/詩人が死んだとき/友達はみんな/友達はみんな/友達はみんな泣いた……

エディット・ピアフやジャン・コクトーが亡くなったのが、改めて1963年と知ると、60年ほど前の近い時代のことなのかと、驚いてしまう。子供の頃は、ちょっと歩くと原っぱというか、小さな野原があつて、ひっそりと矢車草を目にしていたのだが、今や、矢車草の花も、都心を離れた友人の写真に頼るほかなくなってしまった。

鈴木幸一 IIJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.